

29291 10-7

540
2
1

7005

文化課
藏

福岡市

持田ヶ浦古墳群 1・2号調査報告³

福岡市埋蔵文化財調査報告書第16集



福岡市教育委員会
1971

発刊のことば

近年、福岡市および周辺地域の開発にともなう、各種造成工事の激増ははなはだしいものがあります。ここに報告します持田ヶ浦古墳群もその例にもれず、宅地造成のために止むなく記録保存のための、緊急調査を実施したものであります。

当委員会では、今後も文化財の保護と活用のため、努力する所存でありますので、市民各位の御協力をお願ひいたします。本書が各位の郷土に対する認識と理解の資料として、御利用いただきますなら幸甚であります。

本遺跡を調査いただいた別府大学考古学研究室および関係各位に対して、深甚の謝意を表します。

昭和46年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 豊島延治

調査関係者

調査委託者 馬場彦次

調査員 賀川光大 後藤重巳 (以上発掘担当者) 天本洋一 青崎和憲
小池史哲

協力者 相互建設株式会社 月隈公民館 小方寅太 秋根卯之吉 道藤託茂
白垣硯堂 春日賢吉 高田一弘

福岡市教育委員会



序 文

1970年7月、福岡市大字金隈字持田浦所在の古墳群の一部が福岡市相互建設株式会社の造成工事で破壊されることになった。その記録保存調査を別府大学考古学研究室が依頼に応じて実施し、本報告はその記録である。調査には、別府大学文学部後藤重已助教授、学生天本洋一、青崎和志、小池史哲、福岡市教委文化課田坂美代子があたり、他に地元民の参加を得て14日より31日迄18日間実施された。

遺跡は、造成工事の際に1号墳の一部を削除した後、それ以前に全景を一変するほどの破壊があった。したがって舌状台の先端の状況は往時の景観ではなく、すでに数基の古墳が消失していたものと推察された。ともかく、1号墳は大破して古墳址の状況をとどめたのに対して、2号墳は運よく盗掘をうけたにもかかわらず、福岡地方稀有な竪穴式石室をほどこすと認め、その遺構を記録することができた。

調査は1号にあって、大破した横穴式石室の基礎的構造の調査、2号では、竪穴式石室の構造の調査に主力をおいて実施され、それぞれ目的を達成したと考える。しかし、1・2号とともに、主体部構造に注目すべき点があったにもかかわらず、その年代を考察すべき遺品の散逸していたことにより、造営当時を推察するにとどめた。それにしても、明確に、新旧二時期を分ける石室構造が明らかとなり、今後この地方での石室構造の研究に注目すべき問題を提起したことになる。

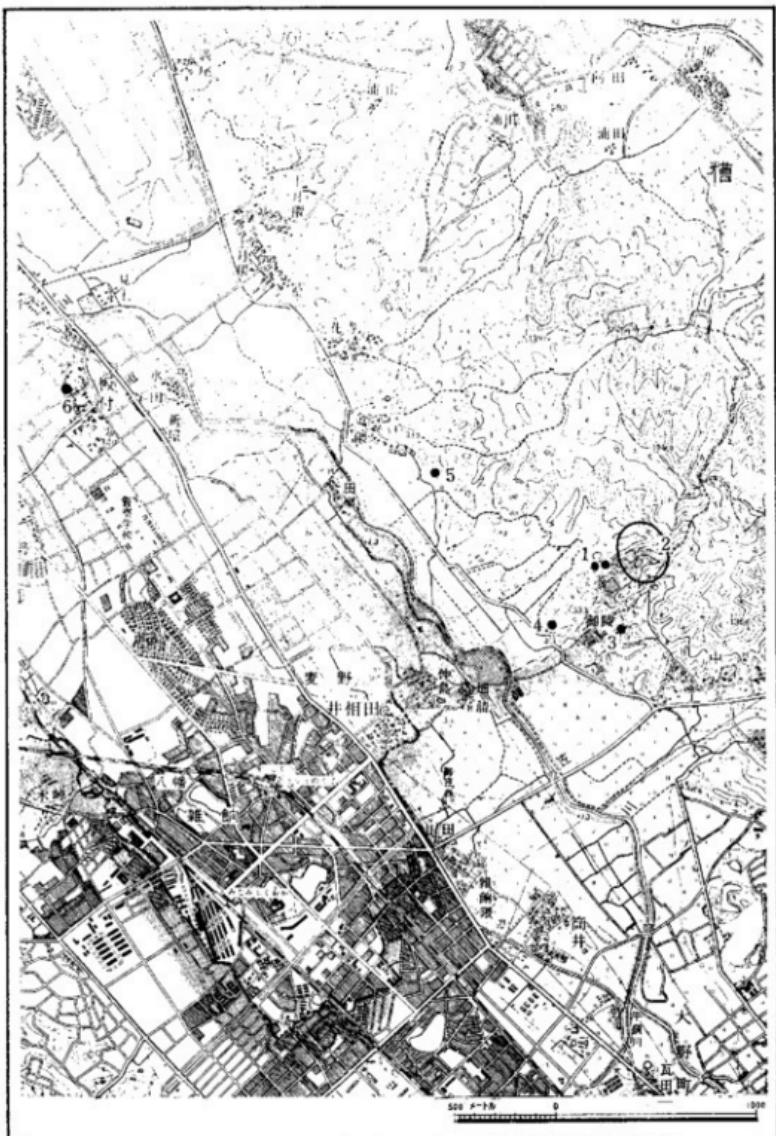
本調査には、報告書作成まで若き三学徒がその責任を果たし、それぞれ担当の執筆および製図をおこなった。その労苦に対して深く感謝したい。
(賀川光夫)

目 次

I 調査にいたる経過	2
II 遺跡の立地	3
III 持田浦 1 号墳	6
IV 持田浦 2 号墳	13
V 結 び	

挿 図 目 次

- 第1図 周辺の遺跡
第2図 持田浦 1・2号墳展望
第3図 持田浦古墳より福岡平野を望む
第4図 持田浦 1・2号墳地形図
第5図 調査前の 1号墳近影
第6図 持田浦 1号墳石室平面図及び側面図
第7図 持田浦 1号墳石室
第8図 持田浦 1号墳西側及び奥壁根固め
第9図 持田浦 1号墳遺物（金環、留金具）出土状況
第10図 持田浦 1号墳土層図
第11図 持田浦 2号墳竪穴式石室全影
第12図 持田浦 2号墳竪穴式石室実測図
第13図 持田浦 2号墳竪穴式石室平面図近影
第14図 持田浦 2号墳竪穴式石室石積み状況
第15図 持田浦 2号墳土層断面図



第1図 周辺の遺跡

第1図

1.持田浦 1・2号墳、2.持山浦古墳群、3.御陵古墳、4.今里大塚古墳、5.金隈遺跡、6.板付遺跡

I 調査にいたる経過

所在地・福岡市大字金隅字持田浦 212-1

福岡市の東部、四王寺山塊からほは御笠川に平行して北西にゆるく伸びた月隈丘陵上に所在し、筑紫郡大野町との境界を接している。福岡平野に面した西側丘陵部には弥生時代のカメ棺遺跡で知られている金隈遺跡があり、また、本遺跡周辺には今里不動古墳、御陵古墳などの所在が知られている。

本遺跡はすでに持田浦古墳群として200余基を数える古墳時代後期の群集墳として知られているものであり、今回の調査はその古墳群の一部を発掘調査したものである。遺跡所在地は福岡市舞鶴、相互建設株式会社、馬場彦次氏の所有地であり、本年4月、宅地造成のため伐採、表土削除の工事が開始された。その際に、熱心なフィールド・ワーカーとして知られている高田一弘氏によって発見され、市教育委員会への通報を得たものである。4月16・17日の両日、文化財担当者を現地へ派遣し、墳丘（円墳）を残すもの1基、すでに削平され石室の一部が露呈したもの2基を確認した。緊急調査を要するため、本格的な造成工事に入るまでの期間を利用して、発掘調査を行うことの快諾を得、7月15日～31日の調査実施となったものである。

注記・調査実施前に再度現地を視察した際にすでに削平のため石室の一部が露呈していた2基の内1基が、不注意にも再度削平を受け破壊されており、わずかにその痕跡が認められるだけの状態であったので、今回の調査では除外し、他の二基を調査の対象とした。

（田坂美代子）

II 遺跡の立地

太宰府町東部に源を発し、水城築堤東端を流れ、大野町中心部・板付地区を経て福岡市旧市街東部を貫流する石堂川は、その中流域より上流を御笠川と俗称する。

他方、この御笠川の東部には、東南方四王寺山塊から70m～200mの比高で月隈丘陵が北方位に当河川平行にのび、船屋郡志免町・宇美町と福岡市板付地区との境界をなしている。

この丘陵稜線より、西方福岡平野に面する傾斜面及び、御笠川東岸の沖積部が、御笠川中流域における主な集水源である。

今回、調査の対象となった二基の古墳を含む200余基の「持田浦古墳群」は、大野町、宇美町の境界線上にはば接した福岡市大字金隈字持田浦の傾斜地形部に所在している。

板付地区から、御笠川沖積部の縁辺山際を走り、大野町に通ずる県道沿線では、当古墳地域のみで、山側に小谷が形成され、狭面積ながら、水田がみられる。

この景観は、この地域でのみ、派生小丘陵が、御笠川に対して直角位に西に向ってのびているからであり、この小丘陵部分の背上に当遺跡はいとなまれている。

調査対象となった古墳の所在するこの丘陵は、圃地用道路の開設によって、その中央部を陸軸に対し直角に掘り切ったために、今日では、その先端部のみが、孤立した丘陵の景観を呈している。対象古墳は、その基部に近接して所在する。

I項でも述べたごとく、当遺跡はすでに工事進行の過程で調査が計画されたため、半壊状態の石室部分以外は、封土を含めた地形的景観は、ほとんどその原形を知ることができない。

第1号、第2号墳に隣接して、他に何基かの古墳が存在した痕跡は認められるが、確証する術はない。

当遺跡周辺では、台地先端部に「今里古墳」、南200mの低地に「御陵古墳」がある。

更に台地北方に接する谷部に半壊状態で後期石室墳、その谷に接する北側の板付山荘台地に石室墳使用の石材の集積を見る。

この台地では、終戦直後、先端部で「礫石を積んだ石室」三基を開墾中に発見していると言う。

一方、月隈丘陵周辺を巨視的に見ると、約3km北方には「金隈遺跡」^①、西方沖積平野には「須玖岡本遺跡」^②、南方大野町太宰府地域には「成星形遺跡」^③を始め、「盜原横穴古墳群」、「乙金遺跡」^④など、弥生、古墳期各期を通じる遺跡が密集する。

月隈、金隈、持田浦のいわば「御笠川東岸山麓線」は、博多、太宰府、宇美に通する古

代街道の一部であることを考へる時、未調査部分の多い持田浦古墳群の存在意識は、まさに大きなものがあり、今後の調査に期待されるところである。（後藤重巳）

註① 「金隈遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第7集 1970年。

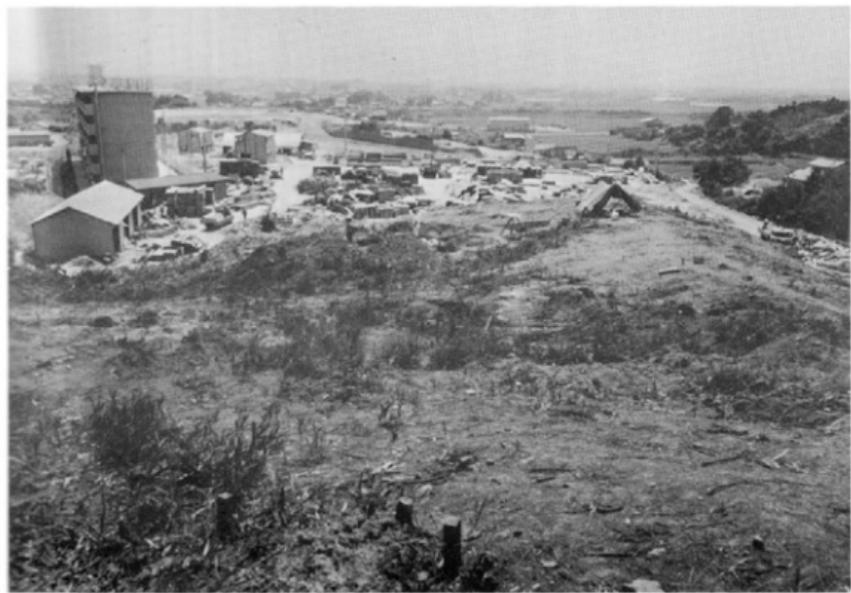
② 「福岡県須玖國本遺跡調査概報」福岡県教育委員会、1963年。

③ 「成屋形遺跡調査概要」福岡県教育委員会、エーザイ株式会社、1968年。

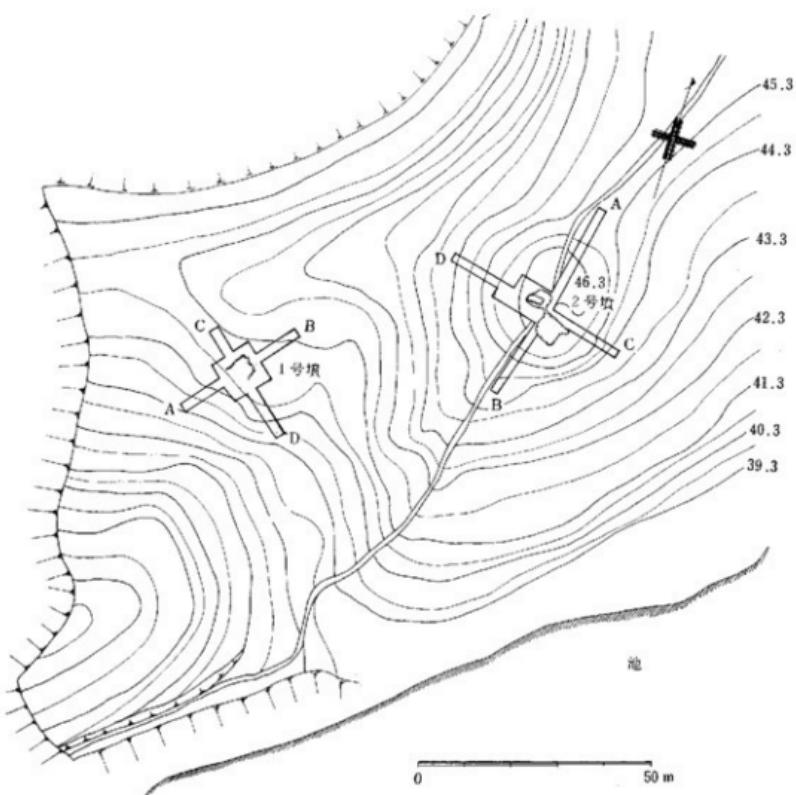
④ 「筑紫郡大野町発見の古式弥生式土器」渡辺・小山 九州考古学15号 1962年。



第2図 1・2号墳展望



第3図 持田浦古墳より福岡平野を望む



第4図 持田浦1・2号填地形図（縮尺1/200）

III 持田浦1号墳

墳形〔第4図〕

持田浦1号墳は、福岡平野を望む月隈の舌状台地の南斜面を利用して築造されている。1号墳に近接（北西30m）して丘陵の尾根にある2号墳が比較的良好な墳丘を残すのに対して、1号は石室を含めて大破の状態にあった。この破壊は調査前、造成事業により墳頂附近並びに羨道部が削除され、石室の一部のみ露見される状態となった。この周辺に古墳の石材が破片として散乱している。したがって墳丘は土類の削除でもとの形状を残さず、高さも明確でない。古墳存在の様相をなくした1号墳の削除された部分を補足して、本来の形を想定すると、直径約15mの円形古墳となる。

墓門は最も傾斜の急な南西側に向って開口し、石室の主軸はほぼ南北を示す。

石室の基部構造は地山面より隅丸方形に掘り込まれ、その平面形は石室と同様、長方形で最大幅4.6mを測る。

奥壁部と西壁部の遺構は、ほぼ同レベルからの地山面より、割合急な角度で掘り込まれ地山面からの深さ約50cmである。奥壁部の石材（壁石）には比較的大きな石をすえ、基部では土塙縁と石材（奥壁）の間隔が接近して、土塙いっぱいの石材を配置して石室を築造し



第5図 調査前の1号墳近影

ている。西側の築石には、根固めとみられる石や、支え石が土塙と築石の間に挿入されている。東壁部の上塙の縁端は、西壁部の掘り方と違い、ここでは、ゆるやかな角度で地山面より掘り込みを入れ、全体として石室構築前の上塙底面は東側が50cm低くなる。これは、自然の地形の傾斜に合せたためと考えられる。東側壁基部にそって長さ50cm、最深34cmの落ち込みがあり、東側壁の石材はその落ち込みにはめ込む。Eトレンチで、東壁石室側面より東へ約6mの地点で、地山面が深さ40cmの段落ちのあるのが目立つ。

本墳は、舌状の自然丘を利用しているため封土は、斜面下の部分に厚く盛られなければならないだろう。しかし調査前の造成工事でそのような事実は空しくなっていた。封土に葺石が存在したか、埴輪に溝が存在したか、その他、封土とそれにまつわる遺構について推測を許さない程に破壊されていた。わずかに石室基部の遺構が記録にとどめられる程度の状態であったのは惜しまれた。

石室〔第6図〕

石室は幅4m、長さ約4.6mほどの長方形の土塙内に架構されている。封土の中央に構築されたとみられる横穴式石室は簡単な狭道をもったと思われる長方形单室である。石室主軸N-22°-Eで墓門は南西に開口する。以下便宜上奥壁に向って右を東壁、左を西壁として記述を進める。

横穴石室は、平面実測図(第6図)の如く狭道との境に袖石をもつ单室である。その石材に花崗岩を利用していたが、腰石部とその上の石の一部を残すのみで、築石の旧状を留めず天井の状態も推定出来ないほど破壊されていた。残りの石室の一部と基部土塙などにより玄室は奥壁と入口までの長さ2.8mを測り、幅は奥壁部で2.23m、入口部で2.0mを測り、長方形の形状をなす。東壁の腰石部は外側に湾曲し、最大幅2.4mを測り胴張りの傾向を示している。また奥壁と側壁とが直角になっておらず、西壁が東へ10度振れている。

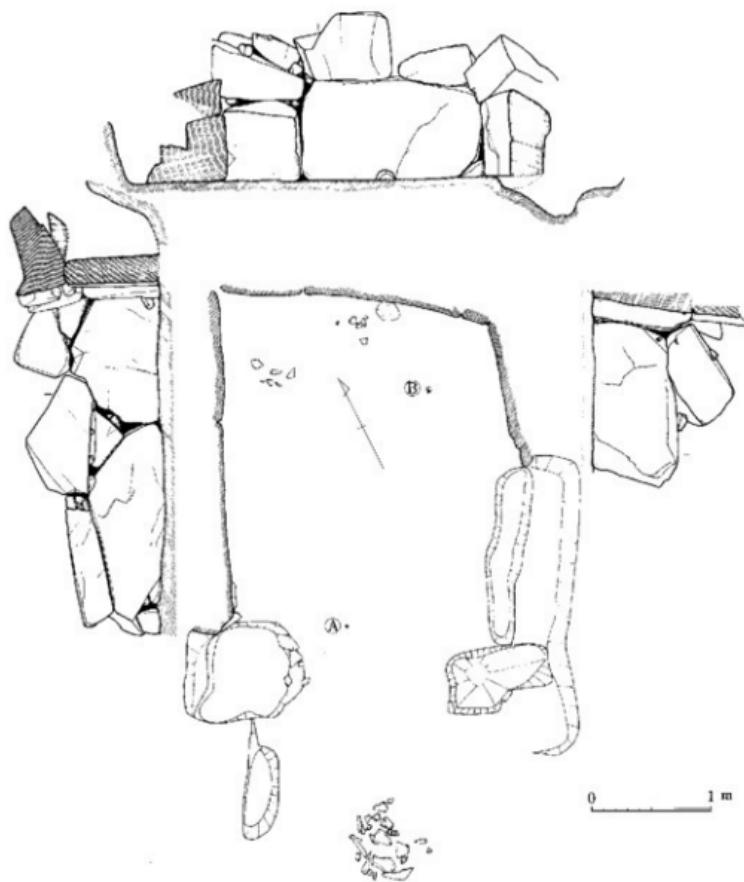
奥壁は2個の大石からなっているがこの奥壁部が最も保存状態が良い。左右壁も同様腰石に大石を控え、その上位にもかなり大きい石を横に据えている。特に目立って石材の大きいのが奥壁石で0.85m×1.5mの大石である。

石室を架構する際、1段ごとに裏ごめを行い積み上げた石と石の間隙には、小礫や粘土を詰め込んで、上位の石を積んでいる。袖石は完全に取り除かれており、石を据えた痕跡があり、それによると左袖石は、かなり大きく丸い石材を利用したと推察される。左右の袖石間隔は玄室入口で1.2mを測る。

狭道部の側壁も全く存在していないので、基部の塙と石を据えた痕跡に頼るほかはない。したがって狭道の計測または築石状態など一切不明である。

石室断面を見ると、基部腰石の上位積石から側壁が石室内部へせり出している。

石室の床面は、南北で大きな高低差は認められない。奥壁附近に点々と角礫が確認されたが、これは石室が盜掘された際、碎かれたものであろう。その他床面に全く礫をみない。



第6図 持田浦1号埴石室平面図及び側面図 ④金環 ⑤留金具

床面は地山と同じ土壌で小礫まじりの粘土質土壌で、敷石の痕跡がないので地山を整形して床面としたと考えられる。この点擾乱後の遺構であるので明確を欠く。狭道部の床面も玄室床面と同様、敷石の存在は認められない。玄室入口中央から南へ1.4mの所に小群の石が残っていたが、石の状態や形から考えると敷石ではない。しかし床面は本来石室から狭道入口に向って傾斜していると考えてよいので、この部分が地山の築土で放置されているということに若干の疑問はないではない。

遺物〔第9図〕

金環 盗掘の残りと考えられる金環1個が玄室入口より出土。最大径2.7cm、最小径2.4cm、断面径0.5cmを測り、銅地に金箔を上塗りしているが、酸化し、箔は剥落し、保存状態は悪い。

留金具 奥壁附近より出土しこれも金環同様、保存状態は悪い。

須恵器 玄室内より須恵器片、甕と思われるものと、狭道部より口縁部が出土した。前者には打文、青海波文が器の内外壁面に施され、後者には二線の凹線文とその間に波状文が施文されている。〔第9図〕

(天本洋一)

Nトレンチ

Sトレンチ

Ⓐ 表層

Ⓑ 表層

③ 黒褐色土層

④ 赤褐色粘土層



第7図 持田浦1号墳石室



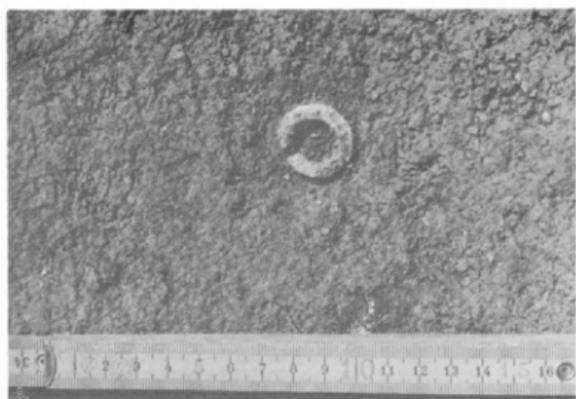
西側壁根固め



奥壁根固め

第8図 持田浦1号墳

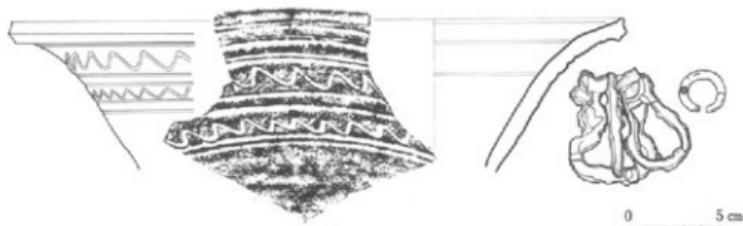
- | | |
|---------------|-----------|
| ◎ 黄褐色粘質土層 | ◎ 黑褐色土層 |
| ① 地 山 | ① 黄褐色粘質土層 |
| Eトレチン | Wトレチン |
| ④ 表 層 | ④ 表 層 |
| ⑩ 赤褐色粘質土層 | ⑩ 赤褐色粘質土層 |
| ◎ 黑褐色土層 | ◎ 黄褐色粘質土層 |
| ⑪ 黄褐色粘質土層 | ⑪ 地 山 |
| ⑫ 地 山 | |
| ⑬ 犁道部側壁跡 | |
| ⑭ 地山まじりバイラン土壤 | |



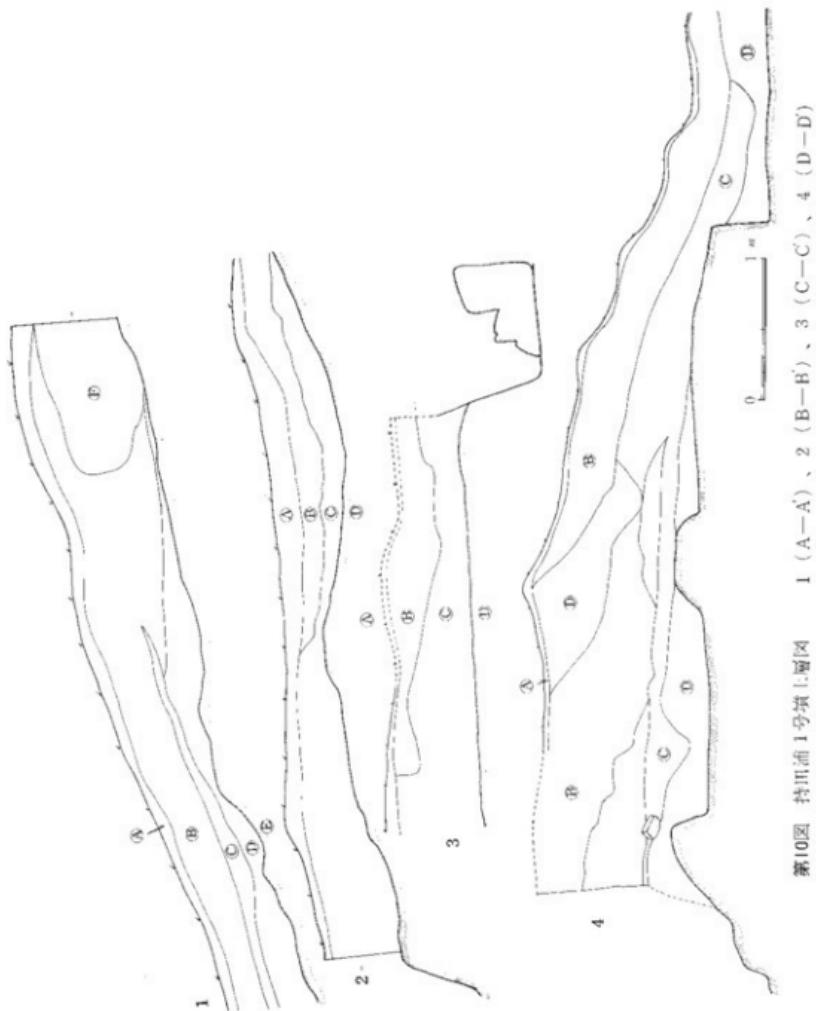
金環出土状況



留金具出土状況



第9図 特田浦1号墳遺物



第10図 特川山1号墳上層図 1 (A-A')、2 (B-B')、3 (C-C')、4 (D-D')

IV 持田浦2号墳

墳形〔第4図〕

1号に近く舌状台地の尾根端に築造された円墳である。花崗岩バイラン土壌を削り、その上に塗土して台状に重ねた封土で築造されるもので東西径18m、南北径19m、高さ約2mを有する。

埋葬施設は墳丘の中央南寄りと西寄りの二ヶ所に構築されていた。この埋葬施設はすでに盗掘を受けており、南寄りで一辺2.6m、深さ1m、西寄りで一辺2m、深さ0.8mの隅丸方形状の盗掘穴が存在していた。内部を調査した結果、南寄りの盜掘穴からは径3m、深さ約2mの円形の掘り込みが確認されただけで、石材採集のためか埋葬施設は完全に破壊されており、墓坑内からは数個の栗石しか発見されなかった。西寄りの盜掘穴からは竪穴式石室の蓋石が確認され、この古墳唯一の現存埋葬施設となつた。

墳丘上には葺石等の施設はなく、墳頂は比較的平坦で土壤の流失が見られた。

石室の構造〔第11図～14図〕

墳丘の中央西寄りに構築された石室は主軸を東(E—2°—S)に向けて存在する。小塊石を小口積みした竪穴式石室で、床面での長軸170cm、短軸50cm、上端での長軸165cm、短軸40cm、高さ55cm、天井には3枚の蓋石を架けている。側壁には朱が付着し、床面にもわずかに確認されたが蓋石には付着していない。側壁は西壁を除き各5cmほどせり出している。西壁には壁に落石部がみられ他壁のようにせり出しがみられない。しかし西壁も他壁同様せり出していたと思われる。石室内は攪乱を受けており、粘土床等の遺構は確認されなかつたが西隅にわずかながら粘土が存在した。

墓塙は石室上端面で長軸350cm、短軸190cm、隅丸の長方形を示しており、中央に設けられた竪穴式石室との間には小礫が積まれている。この栗石は適当につめたのではなく互いにかみ合わせて築成され、さらに栗石の壁面には築石安定のための粘土がつめられ、石室の耐久性を考慮している。

蓋石は比較的整った玄武岩と不整形の花崗岩、結晶片岩(石英質)の三枚を用いており、この蓋石上には約1mの封土がおおっていた。

側壁及び栗石の石材は花崗岩、結晶片岩(石英質)が多く用いられ、玄武岩がわずかに見られた。側壁は扁平礫が、栗石は円礫が多く用いられている。

石室発見当初、石室は蓋石が移動し石室内に土壌が流入しており、すでに盜掘されていることは予想されていたが、石室内は予想以上に攪乱されており、取り残しの遺物もなく本墳の年代を推定する有力資料を欠く結果となつた。

土層〔第15図〕

花崗岩バイラン土壤上に築かれた墳丘は赤褐色粘質土層、灰色土層、暗黄色粘質土層、淡黄褐色粘質土層、黃褐色粘質土層を中心にして赤褐色土層、黒色土層、明黄褐色砂質土層、灰黄色土層を一部含む9土壤によって築土されるという築造方法をもって墳丘を形成している。

赤褐色粘質土層—附近一帯に広がる地山(花崗岩バイラン土壤)を積み上げたものと見られる。石英質の小礫、砂が混じり粘質を帶びている。墳丘の上面全域に見られる。

赤褐色土層—南北断面の中央に見られるもので赤褐色粘質土よりも赤みがかっている。

暗黄色粘質土層—墳丘の最下部に広がるものでオード色状を示し、粘質を帶びている。

淡黄褐色粘質土層—南北断面上に見られるもので粘質を帶び、石英質の砂を含む。黄褐色粘質土層よりも明るい。

黄褐色粘質土層—南断面地山上に見られるもので粘質を帶びている。暗黄色粘質土層よりもやや明るい。

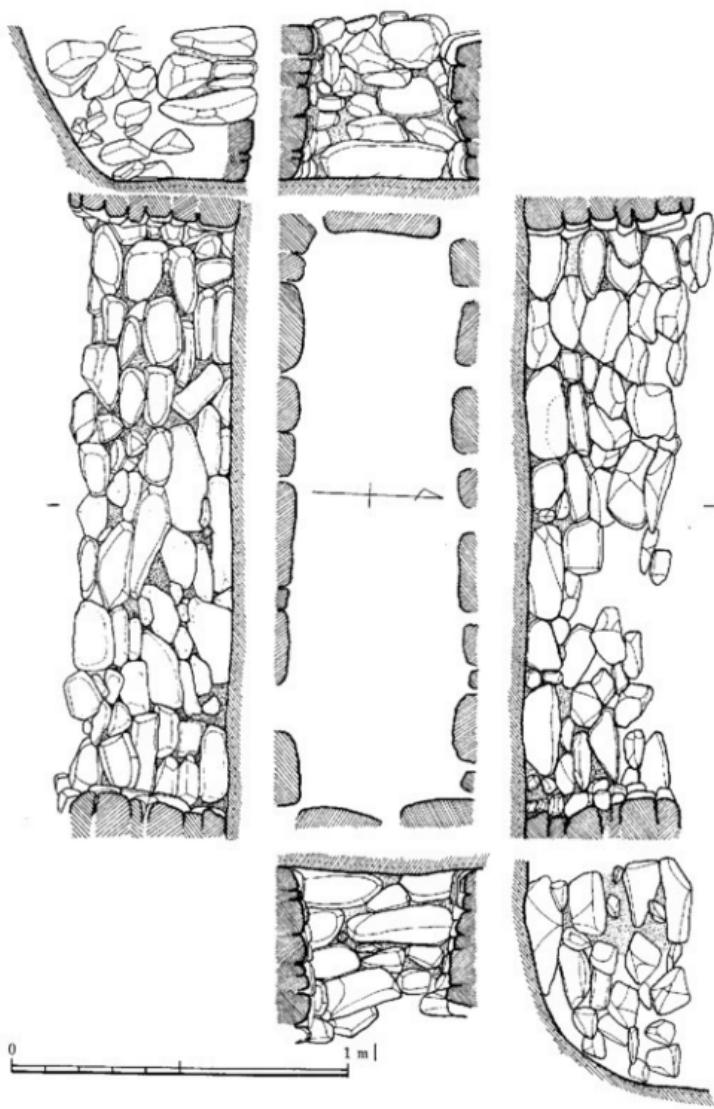
明黄褐色砂質土層—東断面墳丘端に見られるもので石英質の砂を多く含む。黄質土壤では一番明るい。

灰黄色土層—南北断面の中央地山上に見られるもので石英質の小礫、砂を含む。

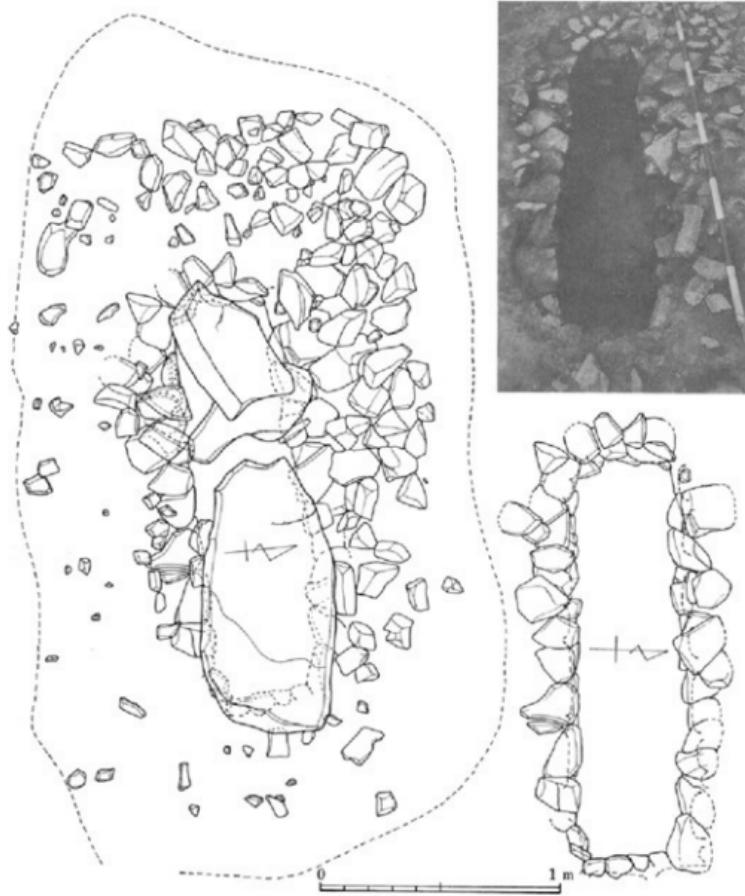
灰色土層—墳丘断面の中央にはほぼ全域にわたって見られるもので5cm内外の帶状を示し



第11図 持田浦2号墳堅穴式石室全景



第12図 持田浦 2号填塗式石室実測図



第13図 持田浦2号墳竪穴式石室平面図、近影

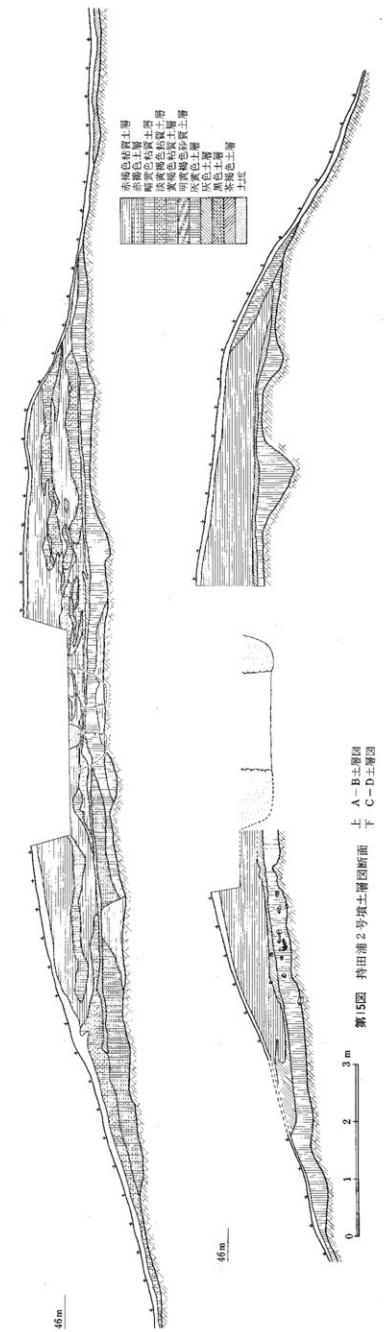
ている。石英質の砂を含み、炭化物が多く混入している。

黒色土層—南北断面上に見られるもので粒子が密で保水性がある。

墳丘の土壤は大きく4層に分けられる。すなわち地山上の暗黄色粘質土層、黄褐色粘質土層、灰黄色土層、赤褐色粘質土層のⅠ層、帯状に広がる灰色土層のⅡ層、南北断面上にレンズ状に広がる赤褐色土層、黒色土層、灰色土層、淡黄褐色粘質土層のⅢ層、赤褐色粘質土層、明黄褐色砂質土層のⅣ層である。東西断面にはⅢ層は含まれない。Ⅲ層が観察できるのは南北断面である。特に北断面はⅠ層～Ⅳ層と規則正しく構成されている。Ⅲ層が



第14図 持田浦 2号墳石室石積み状況



第15圖 桑田油2號土壤剖面圖 上 A-B土壤剖面
下 C-D土壤剖面

南北断面のみに含まれ東西断面に含まれるのは、丘陵の傾斜にそって帶状に築成されていることが考えられる。

さて石室の構築方法であるが、石室を構築する場合普通(1)墓塗を地山へ掘り込み石室を構築する。(2)封土をおおいながら石室構築を平行する。(3)封土をおおっておいて墓塗を掘り込み、石室を構築する三方法が考えられる。本古墳は地山への掘込みがほとんどなく、さらに墓塗域がⅣ層の赤褐色粘質土層から行なわれている点を考慮すると、封土をおおっておいて墓塗を掘り込み石室を構築する方法が採用されたと思われる。(青崎和蔵)

V 結語

前文において述べられた二基の古墳は、本市および筑紫郡大野町にかけて分布する、持田浦古墳群に属するものであるが、それぞれ築造年代を異にする。いずれも年代を示す遺物を欠ぐが、第1号は6世紀後半に比定しても大過はあるまいと考える。第2号の小形竪穴式石室については、類似遺構をみるとことにより考えてみたい。管見に入った遺跡はさほど多くはないが、下記があげられる。

紙数の都合上簡記すると、

- ① 成星形遺跡、約4基、出土遺物は鉄劍・鉄鎌・鐵挺状製品など。^{註1}
- ② 今宿第2号墳 扇甲(小札など)。^{註2}
- ③ 片山第11号墳 鉄劍。^{註3}
- ④ 虚空蔵第11号墳 石室内塗朱・鉄劍1・鉄斧1・鉄鎌2。^{註4}

上記4遺跡は、本第2号と完全に一致するものではないが、本墳を考える上に、さらにこの種の小形竪穴式石室を考察する上にいくつかの示唆を与えるようである。例えは石室の寸法、石の組み方、遺物の量と組み合せ、低平とみられる封土などである。

またこの種の石室には横口部の構造をもつものがあるが、本2号には認められない。^{註5}

第2号墳の築造年代については、上記例を考えて、5世紀後半におかれると考える。

本報告の編集は、別府大学の後藤助教授以下調査員諸氏によるものであるが、田坂がこれに協力して実務を行った。(三島格)

註1 昭和44年2月福岡県教育委員会(松岡史・坂屋勝利・高田一氏ら)により調査。(第3次)

註2 『今宿古墳群』福岡縣文化財調査報告 38集 1968年。

註3 『片山古墳群』福岡縣文化財調査報告 46集 1970年。

註4 『埋もれていた朝倉文化』1969年。

註5 註3石山論文および小田富士雄『日本の考古学』4(九州)1969年。など。

540-4-4

(倉) 2006.7.11

持田ヶ浦古墳群1・2号調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第16集

昭和46年3月31日発行

編集 別府大学考古学研究室
発行 福岡市教育委員会
印刷 株式会社 川島弘文社

文
化
課
藏